

「風の盆」を通して見た八尾町の地域と住民の関わり

長尾洋子

本論文の目的は、祭りを通して「住民の地域に対する愛着」の実相を把握し、その形成過程と変容のプロセスを追うことである。対象地域は富山県婦負郡八尾町である。

まず、第1章では研究目的・方法を明らかにする。次に第2章で八尾町の歴史と地域構造を概観し、旧八尾町と、町村合併によって現八尾町に組み込まれた隣接地域の特徴を大まかにつかむ。第3章では「風の盆」の進行を人々の行動を追いつながりながら記述し、第4章では「風の盆」において顕在化する八尾町の空間秩序と社会関係に注目しながら、愛着の形成過程を追いつながりながら、実相を把握する。また、芸能としての「おわら」・おわらの祭典である「風の盆」の変容と、それによって具現化されている愛着の変容のプロセスをたどる。最後に第5章では地域にとっての祭りの意味を考察する。

「風の盆」は9月1日から3日にかけて行なわれるのでその前後にわたる8月3日から9月5日にかけて現地に滞在し、聞き取り調査と観察を行なった。

祭りの変遷は愛着の形成と変容過程を映し出すという視点から、調査結果に基づいて現在の「風の盆」に至るまでの経過を形成期、展開期、安定期、開放期、分割期、活用期に区切った。

まず形成期では、旧八尾町が物理的な空間構造・社会組織として形成され、空間認識の基礎が出来上がった。また、「風の盆」の始まりは町の起源と密接に関係しているから、町への帰属意識が確立したといえる。同時に「風の盆」の舞台装置が整えられていくことで旧町部と近隣地区の境界の意識化が進行した。

次に展開期では「おわら」が洗練されることで、郷土芸能としての固有性が確立され、社会変

動に対する適応力が獲得された。また、競演会開催や町内行動の始まりは、観せる側面の意識化・町内への帰属意識の萌芽を促し、「風の盆」は都市祭礼として成熟した。これは戦後の開放化における秩序の基盤となった。

形成期・展開期の後安定期には「風の盆」は祭り空間として整った形で行なわれた。

戦後になって開放期に入るとそれまでの社会階層・性別・年齢・居住地区の枠はずれて参加対象者の拡大がおこり、また祭礼空間も拡大された。開放化は性別・年齢・居住地区による帰属意識・境界の重層化を伴って進んだ。

帰属意識・境界の重層構造は、分割期において社会環境の変化に伴う地域的分断によって意識化された。また展開期になされた「おわら」の洗練を土台として演技集団の細分化が進んだ。

活用期では祭り・芸能の機能を地域活性化に活用することで全町を対象とした意識的・戦略的な愛着の形成の試みがなされている。

以上の考察から見えてきた、住民の地域に対する愛着の実相とは「ある特定の地域社会の成員としての行動の意思」であることにほかならない。地域にとっての祭りとは、愛着つまり「ある特定の地域社会の成員としての行動の意思」を実現する場なのである。

フィールドワークを通して、祭りはさらに祭り空間そのものとは別の「もうひとつの生活空間」を創出することがわかった。「もうひとつの生活空間」とは日常空間と非日常空間（祭り空間）の連結部分を指す。地域にとって祭りは、愛着を実現する場であると同時に、日常でも非日常でもない「もうひとつの生活空間」を提供しているのである。